

CI は、「企業価値創造運動」とか「企業再生運動」ともいわれます。実際に、CI を導入して、一段と力をつけた企業や、つぶれかかった状態を脱し、見事に立ち直った企業も少なくありません。数かぎりなくある企業経営の方法論の中で、CI は、「総合的」「客観的」で「シ

ステマティック」なのが特長ですから、失敗の可能性が比較的 low、また経済的であります。

新しい時代の経営戦略の一つとして、これからも CI は、時代の脚光を浴びることでしょう。

コ ラ ム

分 析 雑 感

「ポーラロに飽いたら原子吸光に留まれ!」という言葉を一昔前に聞いた。今は原子吸光から ICP 発光分析への移行の時とも言えようか。分析機器の進歩は目覚ましい。分光写真器から光電測光の直読式となり、その迅速性に驚いていたのもつかの間、データ処理等のコンピュータ化により、ますます便利になり、精度、正確さが向上し、今や技術の進歩の行く所は予想もつかない。

分析機器の種類も多岐にわたり、全体を把握することも困難である。マイクロビームアナリシス関係では各種測定法の略語だけでも 62 種類にのぼる(「マイクロビームアナリシス」日本学術振興会編, 1985)。米国 Labscan 社のデータベースには 928 社、6 582 種の機器が含まれており、四半期ごとに更新され、検索サービスに供せられているという(Chem & Eng. News

p. 23, 1984, No. 10)。

新材料探索の研究が活発に推進されると共に、解析、計測技術の面での技術的進歩が、いつそう期待されている最近である。微量分析も数 ppm オーダーから数 ppb オーダーとなり、今や数 100 ppb では多量となり、原子 1 個 1 個を数える所まで来ている。保守的な国と思う英国でも産学が協力して分析機器の開発を目指しているそうである。基礎研究における評価の高い英国が、その知識を応用面に生かした時、期待される成果は大きいのではないかと思う。

さて、一方、地味な湿式化学分析が、共すると見落され勝ちである。材料開発段階では化学量論的分析方法が必要とされる場合が多い。しかし、熟練した優秀な湿式分析技術者は少なくなっている。世代の交替期にさしかかっている。大学での基礎的教育と共に、現場での技術の伝承が着実に行われることを切に望む所である。(金属材料技術研究所 大河内春乃)